

## すぎなみコミュニティカレッジ

### 講座『実践に学ぶ、学校サポートのコツ』

#### 第6回講座「自分なりに出来ることを考えよう」

進行：生重幸恵氏〔NPO法人 スクール・アドバイザー・ネットワーク理事長〕

司会：三上けい子氏〔NPO法人 スクール・アドバイス・ネットワーク副理事長〕

1. 事例紹介「山辺ドリーム大学」(VTR) (事例発表の内容は掲載されています)

- ・松本市立山辺中学校における「総合的な学習の時間」との取り組みが「山辺ドリーム大学」として実を結んだ。学校による地域活性化のモデルケースとして、全国的に注目を集めている。

- ・山辺ドリーム大学の講座は、ゴスペル学科、囲碁といった趣味的なものから、郷土史や史跡などの地域密着型のもの、さらに福祉学科、パソコン学科などバラエティに富んだ17講座から構成されており、平成14年度実績で、580名の受講生を獲得している。

- ・一生徒の発想から始まり、学長や学区長、運営のすべてを生徒自身が行うという自主性が特徴で、ドリーム大学の他にも、地域の高齢者との交流活動などを行っている。

- ・ドリーム大学の教師はすべて地域住民であり、学校サポーターの手本として参考になる。

- ・教師の招聘に当たっては、山野辺中学の教師も実際に足を運ぶことで、地域の課題・問題の発掘につながっている。

2. 「ドリーム大学」の事例から学ぶこと

- ・いま自分にできること(学校サポート)がなくとも、役に立つ人を紹介するという方法もあり、これも立派な学校サポートである。

- ・自分の子どもが就学期間中に学校に関わることが重要。サポーターとして活動するきっかけがここで芽生える。親として、子どもに対して地域のこと(地域の課題・人間関係)を教える絶好の機会である。

<山辺ドリーム大学を見学した生重さんの感想>

「山辺ドリーム大学」に関しては、VTRで概要をご理解いただいたと思います。私が大いに学ばなければならないと感じたのは、先ず、土地柄を反映している、環境学科というものがあります。ここは山間地ですから、間伐材が出る、これを利用して、御父さんたちと一緒に、6畳ぐらいのログハウス(ツリーハウスと呼ぶ)を毎年作り、観光客に提供する。あるいは農村地帯では、農業就労者が高齢者ばかりになるので、果物の袋かけなどを手伝うというよう

に、生活上の体験学習を通じて、地域に貢献するよう工夫されています。

各講座は、皆で討議して、人気のないものは切り捨てる、皆でドリーム大学を良くしようと努力する様子に好感を感じました。地域と子どもとの間に山室先生がいて、コーディネーター役を果している。自分が出来なくても、できる人を探し出して、講座に仕上げるのがコーディネーターの始まりのように考えます。

### 3. 学校の情報発信について

(1) 学校の傍に住んで活動している者からの感想ですが「学校から発信される情報が少ない」という意見がよく出ます。このことについて、私の意見ですが、学校に情報を出して頂くように働きかけるのは、PTAだけでなく地域の方々も担う必要がある。そのことにより、学校が、徐々に情報を出しやすい環境をつくり、下地を整える。単に情報を出しなさいと言っても学校は出せません。これは、信頼関係がないと学校は、伝えたくても出せないという事だと考えています。

批判の言葉でない、支援の言葉、支援の活動に対しては、学校側は、本音で応えらると思う。地域の人たちが解決の糸口を作る力になれると分かれば、学校は本音を言うようになると思います。人として痛みを分け合う関係を作る。今まで、学校をくり返しくり返し非難する言葉を、地域は投げかけてきたのではなからうか。その結果、学校は、地域にとって責任の擦りつけをし易い場所となってしまう。学校は建設的な言葉や支援が受けられないから、学校の中で解決策を探ろうと懸命に努力してきたのではなからうか。今後は、地域から、建設的な言葉や、支援を投げかけることによって良い関係作りをする。このような状況になってきたと考える次第です。また、PTAの会長になったら、学校の情報が入るのかということ、生徒さんのプライバシーもあるので、全部出せないこともご理解頂きたいと思います。

### (2) 子どもを中心に考える

例えば、教育にとって家庭環境が劣悪であるとのイメージは、昔なら貧困に起因すると考えれば当然とも遠からずであったと思います。現在ですと、劣悪な家庭環境とは、親が子どもの成績にのみ捉われている。躰は二の次、三の次、親の理想だけを押し付ける、このような家庭を指します。子どもは、家庭で我慢しているから、学校で発散する。いじめをしたり、八つ当たりしてエネルギーを発散するのです。私の持論ですが、地域で子どもを助け、救う事が出来るのは義務教育の期間だけと考えています。親だけが理想のおとなではない事を見つける場所が地域なのです。地域には親よりも幅広く、心温かで、親と違う観点から意見を言う人がいる、気楽に話せるお兄ちゃん、お姉ちゃん、自分を分かってくれるおじちゃん、おばちゃんがいる。みんなみんな、家の周りにいるんだよ、という事を親子ともども理解する。このような、地域のあり方が学校を閉塞感のない場所にするのだと考えているのです。

#### 4 . Q & A コーナーから

司会：学校の環境・状況が親、地域に聞こえてこない。どうすれば聞こえてくるのかなど、何でも結構ですから討論の時間とします。

Q：山辺ドリーム大学で子どもが係わりを持つところをもっと知りたい。VTRでは、子どもが自ら講座を企画するとなっているが、講座を作る過程が紹介されていないように思います

A：生徒さんが関与した過程を示す2年半の資料を次回皆さんに見ていただきます。また、3月27日に教員と教育関係者の方々の参加を得て、山辺ドリーム大学を教材としたワークショップと事例報告会を阿佐ヶ谷中学校で行いますので、こちらぜひご参加してください。

Q：地域に住む親が、学校へ向かって一步前に踏み出す、これは分かる。でも、先生も一步、地域に踏み出す必要があるのではないか。双方、お互いに一步踏み出せばよい、とどうしても考えてしまう。先生が踏み出さないで、こちらから出ると言うことに若干違和感があります。この点どう考えればいいのでしょうか？

A：私は心の中で、先生を怒るのはダメだと言いつけています。では、先生を甘やかしていいのかと言われそうですが、先生とは、将来、子どもを教えたいと願い大学でキチンと勉強を積み上げて、教員として採用され職場に就く。小学校の先生は小学校流の頭の構造になる、浮世と離れるのです。だから、先生さんと話すのが怖い、大人と話すのが苦手という先生が大勢います。その先生に一步踏み出して、外に出て来いと言ったら、学校という穴倉に閉じこもります。先生が一步前に出ようと思つ場所を用意してあげないとダメです。8割の先生は、できるなら親・地域と付き合いたくないと考えている節がある。先生を地域が支援しようとしていることを理解させるためにも、こちらから、先ず一步出る。先生の方から見ると、今は少しも困っていないかも知れませんが。地域から見ると、学校は閉塞感に包まれていると見る。だから民間の手で強く学校に働き掛けていると考えてください。先ず、先生に対して怒らないこと。怒ったら、先生は「自分のできる範囲でします」「人にはもう頼まない」となるので、子どもの学ぶチャンスをつぶしてしまうと考えています。ですから皆さん、チョットだけ、学校に力を貸すというお気持ちで、サポーターをお願いする次第です。

Q：知的障害の方々とスポーツを楽しむと言うNPO法人の活動に参加している者ですが、子どもの純真さ、努力する心などを改めて知り、違う世界を勉強したありがたさを感じています。学校が、人づくりより、点数を一点でも上げる所が変わってしまったことによって、より閉塞感のあるものになったと考えます。閉塞感を破るには、外に興味を持って覗く、地域に出る、お互いを知ると言うことだと思つます。

A：同感です。一人よりも二人、二人よりも三人という具合に、学校のサポーターとして参加支援して戴く方を求めています。参加なされているNPO法人もぜひ、私たちの活動の支援に立ち上がっていただきたいと思います。

Q：小学校の子ども保護者として発言致します。率直な意見になります。が、どうも学校は保護者をないがしろにしていないか。地域に学校は情報を発信するのだと言うが、この場合、地域人間には保護者を入れていないように思う。総合学習の時間に民間の人が授業をやると聞きますが、保護者には説明がない。結果報告もない。だからどんなことをやっているのか分からないのが実感です。保護者に対して学校の情報が入っていないと思いますが、現状はどのようになっているのですか？

A：学校からの情報は常に手紙形式で流れているはず。中学生は、親に、先生からの手紙を見せないことがあるかと思いますが、学校からは保護者・地域とも、総合学習についての情報は流れています。保護者からの反応が今ひとつの思いです。授業参観も一週間も連続してやっていますし、杉並では、学区弾力化の方向ですから、情報を保護者に公開している。総合学習の時間の講師は、先ず保護者にして頂きたい、適任者がいないなら、次に地域に求める、あるいは企業に求めるという順番です。

#### 学校教師の方からの発言

学校は保護者に対して情報を出す場合「手紙」しかありません。この「手紙」を渡さない子どもがたくさんいます。また、親に渡す「手紙」を選ぶ子どももいる。学校からかなりの情報が出ていると考えてください。親御さんは、「手紙」で知った内容を親同士でメールで流す、口コミで流すという事をやっているようです。働いているお母さんは「手紙」が頼りですので、子どもとよく話し合う事が肝要と考えます。

#### P T A 役員の方の発言

学校も「手紙」が保護者に届かないことでかなり困っています。約半分の子どもが保護者に「手紙」を渡さないと言われていています、私立では、PCメールで学校から親へ直接情報を流す例もある。小学校のHPがあるところも限られており、個人情報保護条例もあり、当分は「手紙」が頼りの現状です。「手紙」を見ない保護者が悪いということになるのかは、難しい問題ですが、保護者は、学校の行事に関する情報があるはずだと考えているわけですから、絶えず、「何か情報があるだろう」と子どもと話し合いをする家庭教育が必要という結論になるのではと考えます。

#### ボランティアの方の発言

8年間、青少年委員として学校に係わり親しくなっている筈の者でも学校は敷居が高いところ、玄関にインターフォンも呼び鈴もない、学校で誰かに

出会っても御挨拶もない、誰も「いらっしゃい」と言いません。常識では考えられない所です。校長先生が学校を経営しているとの感覚は私にはありません。学校は、基本的には、日常性がなく、普通の感覚で付き合うには難しいところだと思います。

#### P T A関係者の方からの発言

2年間自分の子どものことで担任の先生とお付き合いした経験からの意見です。先生は、教諭になったときから先生となり、社会人として、一般人とは違う育ち方をします。自分の間違いに対する批評、非難を聞いて育たないから、先生になったときにおかしければ、30年経っても間違いを直すことなく歳を重ねることになります。東京都に先生の人事権があり、学校長には人事権がありません。学校長は、何かあれば先生に注意はしますが、聞いても聞かなくてもよい訳ですから、校長先生の言うことは誰も聞かないということになります。P T Aも要望は学校に出しますが、最後は先生の手任せられます。学校とはそういう所です。

#### その他の発言

学校長が先生の勤務評定をしますが、どの区でも、どの学校でも受け入れ先のない先生を“ジプシー先生”と呼んでいます。総合学習の時間対策を含めて、本音を語る先生の会（練馬・足立・港）に出席してきた感想ですが、学校から、総合学習の時間を充実する事に対しての要請が強く、各先生方は大変苦しんでいるようでした。教科科目の内容を順番通り教えなくてはいけない思いが先に立ち、創意工夫を考えることができないほど疲れて授業に追われている様子を聞きました。だからこそ、先生に「うまくやろうよ」と声かけしたい気持ちとなりました。

#### 生重さんから「公立学校の良さ」についての発言

私立学校は、一定幅の中に収斂する家庭環境の子どもが通うわけですが、公立学校は、様々な家庭環境の子が通うので、親の考え、心情、行動などもバラバラである、家庭の縮図を体感できる学校と言えます。義務教育9年を通して、社会に出ても立派にやっていける健全な心・躰を身につけ、しかも若干の社会経験もあるという子どもを育てる所だと考えます。いま、文科省も揺れています。学力試験中心の点数主義に戻そうかと考えているかもしれません。総合学習の時間という得がたい教科ができて、子どもに、家庭では出来ない社会性を身につけることが、この時間に出来る。子どもがこの時間で、夢と希望を感じる。その後で、自分の進路や学力を身につける。この順番で間違いがないのですから、どうぞ、学校にこちらから一歩前に進み出でていただきたいと思います。

#### 生重さんから「エコキッズ」について

5月に小学5年生を対象に、杉並第十小学校で、次代を担う環境教育の講座

「キッズISO」を開きます。この主旨は、エネルギー、ゴミ、環境の視点を早いうちに子どもに持たせ、先生、親御さん、地域の方々が、子どもに巻き込まれる形で、環境問題を理解し合えるようになる、共存する視点を持つことを狙いとしています。この講座で、学校の先生と地域の大人が、子どものコーディネートによって、近い関係になることを願っています

#### P T A関係者の方からの発言

現在は、ボランティアが学校に入りやすい時期であると思います。週休2日制、土曜学校開始などで学校はひっくり返ったような状態です。私たちも学校サポーターとしての受け入れ要請をしたら、「どうぞ、どうぞ」と言うことでした。そこで学校の花壇を綺麗にして土曜学校とドッキングするような計画を立てています。ボランティアの申し出では、校長・教頭先生宛にお願い致します。

#### 保護者の方からの発言

学校選択制が始まり、学校の評価について各学校も神経を遣うようになってきている。人気のある、周囲の理解を得られやすい学校に子どもが応募してくることがはっきりしてきたので、学校は地域の意見をよく検討して聞くようになってきている。また、次年度から、新人研修も含み、在籍10年目の先生から年30時間の研修を義務付けるなど、教師の研修を強化するとの情報を得ています。

#### ボランティアの方からの発言

私は、環境け系統のボランティアをしています。学校にしばしば通って、徐々に敷居が低くなってきた体験から一言述べますと、この方面の話を、子どもが私にすると、私が無条件に喜ぶ事を知るようになる、直ぐ私のところに来てしゃべりだします。このようなことが起こるので、あらゆるジャンルの人が、それぞれ自分の得意の話をすべきであると思います。

#### N P O ・ボランティア活動推進センター職員からの発言

先生の職場体験の必要性について発言がありましたが、8年前から、夏休みの期間、小・中・高・大の生徒・学生さん等若い世代の方々向けに、保育園、福祉施設の体験学習プログラムをN P O ・ボランティア活動推進センターで行っています。新任の教諭もこのプログラムに参加義務が課せられていて、三日間以上、同じ施設で学習しています。一週間に2、3カ所も廻るような、熱心な先生もいらっしゃることをお知らせ致します

さきほど岡本課長さんから、本日の開催主旨についてはいろいろお話がございました。いま多くの制度改革が行われておりますが、日本全体の構造そのものを変えていくという中で、教育も例外ではありません。私たちも古きをたずね新しきを知るということを、つねに繰り返していかななくてはなりません。今日が、その良い機会となることを期待しております。とりわけ、かつては、子

どもの教育というものは地域全体で担っていたものでございます。家族でやり、学校やお寺でやっていました。それが、いつの頃からか、教育は学校という、そういう方に意識が向いてきて、子ども全体に対する教育力というものが低下してきました。また学校の先生にかなりの負担がかかるようになってきた。そんなことが言えるのではないかと、私は思います。

そういった意味で、こういった企画を通じて、学校が中心ではありますが、地域全体、もっといえば、私ども杉並区がやっております、すべての政策が子どもの教育というものにつながっているということが意識されていないといけないと思います。いわば、地域全体が教室であるという意識を地域が持っていることが大切だろうと思います。そこかしこが教室である、もちろん学校も教室のひとつです。そういう意味で、地域と学校の教育との連携というものからスタートした本企画が実り大きいものとなることを期待しております。

また、いま新学習指導要領や週5日制というものが導入されて、杉並区でもいろいろな改革が行われておりますが、学校で懸命になって先頭に立っておられる先生方は、ご努力をされて、大変なご負担があると思いますが、そういう中でも、お互いが担えるものは背負って、次の子どもたちに良い教育ができるよう、お互い研究ができればと考えております。また、その成果を杉並の教育に活用させていただければ有り難いと存じます。東京都さんには、改めて物心両面にわたってのご協力をお願いいたしまして、ご挨拶と代えさせていただきます。どうもありがとうございました。